

『山溪叢書2』

小屋番三六五日

人と自然と山仕事、
小屋の暮らしてつておきの五十五話』



¥1,600+税
山と溪谷社

加藤芳樹

「小屋」という存在は、人によって捉え方が違うかもしれない。宿泊施設であり、避難所であり、憩いの場であり、人によっては山における「家」であるかもしれない。もちろんそれだけではない。小屋に從事する人々は、営業するだけではなく、登山道の補修をし、遭難者の救助に向かったり、その役割は多岐にわたる。

本書は、そんな小屋の、いわゆる「オヤジ」や「お母さん」、「兄ちゃん」たちが、自らの一年を振り返ったエッセイ集である。見知った山はもちろん、見知った人が書いているケースもたくさんあるだろう。しかし、一般登山者が触れるのは1年の中

でのほんの一瞬であり、その意味で、一年を通じて、また、数年、数十年にわたる小屋番の生活が垣間見えて興味を湧く。

今まで訪れたことのない小屋であれば、本書を読んだことで、初めて訪れた時には、親近感を持って、また、一人の共感者として足を踏み入れることになるだろう。例えば理想的なトイレを研究し続ける大菩薩嶺の丸山荘などのエピソードを読めば、自ずとトイレに目が行く、というように。

知れるのは、小屋番の私事だけではない。そこにはその山の歴史が刻まれており、また、過去から現在に至る登山者の気質や登山スタイルの変化などが見えてくる。そこが本書の肝であり、その小屋を訪れたことがあるなしに関わらず、一登山者として興味深く読める点でもある。

月刊誌「山と溪谷」に2001年5月号から2006年3月号まで連載された人気企画をまとめたものである。すでに営業形態が変わったり、著者がすでに故人である場合もある。そのことも踏まえながら読むと、よりいっそう考え深い。

『山と人 第17号』

米本隆夫



2008年1月発行
神戸大学山岳会・
山岳部
頒価 ¥4,000-
(日本国内送料含む)

「巻頭の言葉」で神戸大学山岳会（ACKU）の井上達男会長が書いている。「大学山岳部が明確なビジョンとミッションを持つて活動する時代ではなく、なつたようにも見られるが、私はそうではないと思う。話題性を追求するのでなく、視点を変えてより緻密に世界の山々に目を向けていけば新しい切り口でのパオニアワークが可能ではないか（要旨）。井上会長は続けて、神戸大学が先鞭をつけた「ヒマラヤの東」には知られざる未踏のピークがたくさん残っていることを紹介し、これからの登山の方向性をみんなで考えようと呼びかけている。

本号には2003年秋に行われた学術登山隊の「未知への挑戦・ルオニイ峰登山」（平井一正ほか）と、「崗日嘎布（カンリガルポ）山群研究」（井上達男、それに中国地質大学・武漢と合同の「カンリガルポ山群の二〇

〇七年偵察速報」が掲載されている。必読の記録、研究であり、長年にわたるACKUの、この地域への取り組みが俯瞰される。

第四部「ボリビア遠征誌上討論について」は、1963年に行われた「ボリビア・アンデス登山隊」での出来事が、1997年から2001年の5年間にわたって年報機関誌「JACKU-news」で取り上げられ、論議された記録の総まとめである。部外者から見ると「30年も前のことを何故？」という感じもするだろうが、この誌上討論を「回想」の形でまとめた河本卓生編集人は「討論参加者は限定されたいが、この論争は多くの部員・会員に只ならぬ関心を引き起こすこととなった」と書いている。神戸大学山岳会の登山理論や理念にかかわる激論がたたかわされたからである。

ボリビア・アンデス登山隊（金井健二隊長）は海外登山が外貨枠によって縛られていたころの登山隊である。隊員は26歳から33歳までの年齢の近接した5人。それぞれの思いを胸に6000m峰を目指したが、「遠征観・登山観のズレを激しく露呈し：この山行は完全に失敗」と金井隊

長が総括した、昔の「遠征登山」である。ただし「完全に失敗」したという原因は「オブラートでくる」まれ詳しくは報告されなかった。

32年の時が過ぎ、1995年刊の「山と人八十年」で内部分裂の一部始終が金井隊長（元）によって明らかにされる。八十年史として発刊された『山と人』第16号、歴史編の一項目をなす「遙かなエクスペディション」のなかで同隊長は「遠征登山の《知られざる側面》を記録にとどめておく」と書き、以前の登山報告書で「私（金井）の指揮に対する一部隊員の抱いた疑問乃至批判」と書いた中身は、実は「両隊員の反乱」だったと表現を改め、「反乱」「大誤算」の詳細を語ったのである。

「遙かなエクスペディション」の記述をきっかけに、前述のように「JACKU-news」誌上で事実関係や登山論で論争が繰り広げられ、河本編集人によって「回想」としてまとめられるのだが……。執念と怨念、それぞれの主張が入り混じり、いささか生臭すぎるくらいはあるものの、それも「明々白白たるこの山岳会の歴史の一齣を、不問にするわ

けにいかなかった。」（同編集人）という言葉が重い。いずれにせよ、その経緯をつぶさに見ることは、登山におけるリーダーシップや組織の在りようを考える上で大変に有益である。このような経歴を部外に公開された英断に敬意を表したい。

第五部には医学部5年生の現役部員が、90年の夏、ヨーロッパ・アルプスに登った記録がある（「九〇年の長い夏」）。夏の7、8月にたつぷりと岩を登る。休養日をいれながら、8本。もう20年も前のことだ。いまや新人が集まらないと嘆く大学の山岳部であるが、「今もビッグ・ウォールはもう結構、というぐらいに登れて、ケガもなく、大成功に終わった」こんな豊かな登山を実現できているだろうか。さて、本誌において、もっとも感銘を受けたのは、実は後半320ページに及ぶ学生の、18年間の登山記録である。それぞれの記録の中に学生たちの真剣さが読み取れる。もちろん山行記録であるから、日付や場所、コースの状況などの行動記録が中心だが、そのあとに書き加えられている数行の感想や反省点にひきつけられる。文章が光つ

ていて、おもしろい。その臨場感……。その日の山行が終わって、テントの中で、あるいは小屋のベッドで、ヘッドランプの明かりをたよりに書かれたのである。心臓の底からの快哉をさけぶ姿は青春そのものだ。山はやっぱり楽しい世界なのだ、と思

わずにはいられない。最後に苦言。誤植が多すぎます。それも巻頭1ページからである。単純な変換ミスは時にご愛嬌だが、正しい文字が、正しく並んでいてこそその公式記録である。

映画「カラコルム」「チョゴリザ」について

昨年秋に開設された京都大学稲森財団記念館の1階に、京都大学研究資源アーカイブの資料を公開する場として、映像ステーションができました。一般公開です。

記念館内には京都賞受賞者を紹介する部屋や個人閲覧用のブースがあります。今西錦司さんたちのアフリカ研究はじめ、東南アジア研究史、考古学研究、西田幾太郎、湯川秀樹さんたちのビデオ、それぞれ10分程度を選んで見ることができます。

さらに奥の部屋では大きな画面に1955年撮影の「カラコルム」、1958年撮影の「花嫁の峰 チョゴリザ」が一日に二回づつ上映されています。20人ほど入れます。上映時間は

カラコルム*10:15、13:10 チョゴリザ**11:45、14:35（毎日上映、無料）で、開館時間は10:00~16:00です。興味をお持ちの方はい

ちどお訪ねください。

* 京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の記録
** 京都大学学士山岳会チョゴリザ遠征登山隊の記録（いずれも日映新社制作・公開済み）

休館日は日、月、祝日、京大創立記念日（6月18日）と年末年始、場所は川端通り荒神橋東詰めで、京阪電車、神宮丸太町駅5番出口北へ徒歩5分、または市バス荒神口下車徒歩5分です。（電話075-753-7741）